

シンポジウム報告

「もの」研究の新展開に向けて

ー広島大学シンポジウム「資料といかに向き合い、なにを読み解くか」へのコメントー

床呂 郁哉

本稿では、広島大学で開催されたシンポジウム「資料といかに向き合い、なにを読み解くか」のうち、とくに筆者がコメンテーターを務めたセッション2の内容を中心に当日述べたコメントや質疑の内容をかいつまんで述べるとともに、最後はシンポジウム全体にもかかわる論点についても言及したい。

さてセッション1が主に文字で書かれた文書ないし言語媒体によるテキストを扱ったのとは対照的に、セッション2では「モノのエージェンシー」と題して、資料としてのモノを取り上げ、そのモノのもつエージェンシーや人とモノの相互作用などの観点から3人の報告者による報告と、同報告に対する質疑応答が実施された。

筆者自身も最近、人類学の文脈における広義の物質文化研究（ないし「もの」研究）に関連する研究プロジェクトを組織し、成果論集『もの人類学』（床呂郁哉・河合香史共編、京都大学学術出版会 2011年）を出版して間もないということもあり、今回のセッションの個別報告は興味深いものであった。

さて、まず人類学における「もの」（物質文化）研究の文脈からセッション2の前提とする問題意識について述べたい。近年の人類学の研究の動向においては、物質文化の資料を、いわば言語的な意味が描かれたテキストと看做するような視点からいかに脱却するかという問題意識が高まっており、スローガニックに言えば「意味からエージェンシーへ」とでも言うような視点の転換が提唱されている。そして、「ものが何を意味しているのか」から「ものが何をするのか」への転換などが提唱されるようになってきている。具体的にはB.ラトゥールらによるアクター・ネットワーク論(ANT)の議論のように、人だけがエージェンシーを占有するのではなく、むしろ「もの」と人から成

るハイブリッドなネットワークの効果としてエージェンシーを見るような、いわば脱人間中心主義的な視点である。

今回のセッションでは、こうした近年の人類学における「もの」研究の新たな展開の文脈を踏まえて構成された挑戦的な企画であるとまず評価することができるだろう。個別の報告内容の具体的な情報が多いだけでなく、枠組み自体も意欲的で野心的だと言える。そこでは、人ないし身体と「もの」のインタラクション物質性（マテリアリティ）、エージェンシー、記憶、「もの」に触れることと感覚や感情の問題、人と「もの」のインターフェースといったキーワードや問題意識をもとに興味深い報告が行われたように思う。

たとえば第一報告者の越智郁乃氏は「モノの変化から見る墓と人の繋がりー現代沖縄における墓地の変容を通じて」では、現代の沖縄における墓と人のインタラクションをめぐって興味深い報告が行われた。具体的には沖縄本島北部 O 村出身者が移住先的那覇で造墓した集団墓地を題材として墓の改修や墓をめぐる祭祀など 50 年に渡る墓と人のインタラクションをめぐる詳細な報告がなされた。そのなかでは、特に墓が人々にとって記憶を喚起する媒体として作用している側面や、墓を一種の人格的存在と見做すような態度について興味深い議論が行われた。また墓の素材であるとか構造から及ぼす影響（コンクリートの導入で墓の形状が大きく変化したなど）に関する言及も行われた。

なお筆者は、当日のセッションでは記憶のメディアとしての墓という側面に関して、文字媒体との比較と言う観点からコメントを行った。これはセッション 1 の内容にも関連する論点であるが、たとえば文書資料の場合でも、解釈の多義性・翻訳めぐる多義性は存在するが、どちらかと言えば概して想起・記憶内容の方向性を限定していくベクトルが相対的に強いと言える。しかし、これに対して「もの」が記憶や想起の媒体となる場合には、文字媒体に比して、多様な想起、記憶の多様化を促進するようなベクトルがあるのではないかという点などを指摘した。

二番目の報告者である楊小平氏は「モノの力と感情の記憶」と題して広島平和記念資料館（通称「原爆資料館」）に展示されている被曝資料と人（資料の所有者、展示者、来館者）がどのように協働しながら、「もの」に意味づけ

るのか、そして「もの」が人にどのように働きかけるのか、という事例に関する報告を行った。同報告は、報告者自身が広島平和記念資料館で唯一の外国人ピースボランティアとして働いたというユニークな個人的経験から得られた知見も随所に盛り込みながら、「もの」を通じた感情と記憶という問題に関して刺激的な報告を行った。南京虐殺や従軍慰安婦問題など戦争をめぐる記憶と表象の問題は近年、多くの研究がなされるようになってきているテーマであるが、楊氏の報告では特に「もの」との相互作用、特に「もの」が喚起するメッセージの多義性に関する知見を盛り込んだ報告となっていたのが特に興味深かった。

なお一方で博物館というと、概して公式には特定の限定されたメッセージを伝達し、教育する啓蒙的な役割の装置として考えられていることが多い。そうしたなかで楊氏の指摘する展示する側と来訪者の側での受け取るメッセージのズレであるとか、「もの」そして来館者、ボランティアの相互作用が喚起する反応や記憶の多様性は、ミュージアムを運営する側からはどのように認識されているのかという点を筆者は質問し、それに対する応答が行われた。

最後の岡田穂穂子氏の報告は「高等教育機関における障害学生支援と ICT 活用についての人類学的研究の可能性」と題して、障害学生に対する ICT(Information Communication Technology) を使った教育・学習支援をめぐる現場における「もの」(ICT のツール) と障害者の相互作用をめぐる内容であり、やはり報告者自身の支援活動での経験をもとに興味深い個別事例の報告と分析が行われた。同報告のテーマは、近年の認知科学や心理学での状況認知や分散認知、アフォーダンス論などの視点とも通じるものであり、後者においては、たとえば人の認知能力(記憶、認知など)は脳の中核に局在する、という通念的視点を越えて、周囲の人工物を含む環境に分散されたものとして再把握されるようになってきている。

ただしこれは一般的な文脈であり、岡田氏の報告では特に障害学生の事例に絞って現場での知見をもとに個別の事例ごとの特殊性などをより詳細に検討している点が特に評価できると言えよう。たとえば同報告では特に各種の障害者と健常者での文脈の差を指摘し、聴覚障害者にとって電話ではなく電子メールの登場が劇的な変化をもたらしたことについて、興味深い事例が報

告された。

以上、セッション2における個別報告は、いずれも現場でのディテールに富んだ興味深い報告であるとともに、人と「もの」の関係性をよりメタな次元から考察する試みとしても野心的なものであった。なおシンポジウム全体のテーマ「資料といかに向き合い、なにを読み解くか」の文脈で改めてセッション2を捉え返した際には、「もの」の研究においても、主として狭義の「もの」自体が資料であり、その「もの」を資料として読むという立場（これはどちらかと言えば、旧来の、「もの」を言語テキストのメタファーで捉える立場と親和性が高い）に対して、「もの」と人のインタラクションそれ自体こそがむしろ重要な資料となりうるという立場の差異が垣間見えるようにも思えた。

そうすると、そこではセッション1にあったような文字資料を前に、文字テキスト自体をデータとして見る態度とは根本的に異なるのだろうか。それとも実はセッション1でのディスカッションでも言及されたように、資料との内なる対話であるとか、テキストと共に存在し、資料を「身ごもる」というような水準においては、ある種の共通性があるのだろうか。これらの疑問は、今後の「もの」をめぐる研究において検討の余地のある興味深い問題であることを感じた。

(tokoro@aa.tufs.ac.jp)